

# エディトリアル

前 兵庫県但馬県民局豊岡健康福祉事務所企画課主査／  
公立八鹿病院内科・総合診療科 守本陽一

地域医療には課題が山積している。看護師やケアマネージャー不足で維持できない診療所や介護施設，診療報酬に比して上昇する原材料費に頭を悩ませる公立病院，複合的な課題を抱えて押し寄せる利用者と足りないケアワーカーを抱える行政窓口。これらの課題は複合的な課題であり，単純に大量の資源を投入することで解決するには限界がある。人口減少する中で投入する支援者数にも限界があり，厳しい財政下で医療・福祉予算をさらに確保するのは現実的でない。今，新たなデザインが必要となる。

デザインとは，現状をより好ましいものに変えるための行動である。ポスターなどのモノのデザインのみではなく，ICTなどの医療ツール，医療システム，市民参画の手法などのコトのデザインも含む。現場に隠された課題や資源を見つけ出し，三方よしとなる新たなデザインをすることで，停滞していた課題が解決しようと考えている。

今回の特集では，医療とデザインのレビューから始まり，医療現場，公衆衛生での社会課題をデザイナーと共に解く実践例を紹介したい。

まず，対談の笈裕介さんと特集の堀田聡子先生に，認知症当事者の見ている世界を描いたベストセラー「認知症世界の歩き方」について解説していただいた。筑波大学芸術系准教授の岩田祐佳梨先生は，筑波メディカルセンター病院における場のデザインの実践例を，医療者と作り手が協働するコ・デザインのプロセスに沿って解説していただいた。地域活動家小松理虔さんには，医師不足が課題となる福島県いわき市のかしま病院におけるコミュニティデザインのプロジェクトを，医療と地域のあいだをつなぐディレクターとしての視点から，ふくやま病院コミュニティドクター稲岡雄太先生には，「また来てねといえる病院」をコンセプトとしたふくやま病院の10年続くプロジェクトを医師の視点から語っていただいた。さらに，認定NPO法人第3の家族理事長の奥村春香さんには，寄り添わない支援を掲げたオンライン掲示板の取り組みについて解説していただいた。最後に東北芸術工科大学デザイン工学部の森一貴先生には，医療とデザインの概観を解説していただいた。医療現場でのサービス改善を扱うミクロ，地域やコミュニティにおける仕組みや関係性をデザインするメゾ，制度策定や未来構想に関与するマクロの3層に整理し，諸外国の事例を紹介いただいた。

これらの活動の多くで，患者や医療者が共同のデザイナーになりえる可能性を示している。森一貴先生は，石塚らの著書を引用して，人々が持つ他者をケアする能力が発揮される状況を構築することこそ，これからのデザイナーが果たすべき役割なのだと語る。新たな可能性を期待しつつ，それぞれの事例にぜひわくわくしていただきたい。